

親鸞仏教センター通信

2005.
December

2005年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第16号

生 老 病 死

親鸞仏教センター研究員 羽 塚 高 照

10年間過ごした京の街を離れ、2005年4月からこの親鸞仏教センターの研究員に着任し、東京で暮らすこととなった。赴任当時の私は、ちょうど親鸞聖人が比叡山を降りられたときと同じ年齢であり、それはまた、釈尊が2400年以上前、さとりを求めて出家された年齢と同じであった。

釈尊が、世間にある老病死と出家者の存在に気づき、王族の地位を捨てて出家されたという「四門出遊」のエピソードは有名であるが、いまここでは、『ブッダ・チャリタ』(原実訳、中央公論新社、大乘仏典13)に拠りながら、その出家をなんとか止めさせようとした、父であるシュドダーナ(浄飯王)の行動に注目してみよう。

王は息子が誕生した際、ある聖者から「彼は、将来王位を捨て、聖者の道を歩み、やがて解脱の道を解き明かす宗教(ダルマ)の王となるであろう」との予言を聞く。王は喜ぶが、同時に不安にもなる。息子の出家は、王族にとっては子孫断絶の危機となるわけである。そこで王は、息子を半ば幽閉状態にし、快楽を与え続けて、人生に悩むことのないよう、いわば無菌状態で息子を育てる。しかし、門の外に出て、世間の現実を目の当たりにした釈尊は、父王の説得の甲斐なく、ついに門を出て出家するのである。

仏伝文学を読むとき、われわれは当然、釈尊が出家することを知っており、父王の行為はこっけいにさえも映る。しかし、はたしてわれわれは王を笑うことができるのだろうか。

「生老病死」を忌み嫌い、それらを遠ざけ、見ないようにする——という現代社会に対する批判はよく耳にするところである。先の王の行為は、息子から生老病死の苦悩を隠そうとしたものと言える。王が息子を外に出そうとしなかったのは、実際に、世間にはそうした苦悩が充満していたからであろう。現代においては、さまざまな分野における技術の進歩により、生活は便利になり、寿命は延び、不治の病とされたものも少なからず克服されてきている。しかし、先の批判は正しいと認めざるを得ない。いま高度に専門化し、複雑化した現代社会は、生老病死がきわめて気づきにくくなってしまっている。釈尊が、まさに身にせまる切実な問題として背負われた「生老病死」という課題は、見えにくくなっているだけに、一層、先鋭化してわれわれに突きつけられている。

研究員として赴任して以来、各分野で、それぞれの専門的な立場から、「生老病死」の門を開こうとする方々がいることに、あらためて気づかされている。私も仏法に学ぶものとして、現代を生きるひとりの人間として、「生老病死」の事実が人間の生き方を根本から問いかけている課題として受け止めていきたいと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 ここに居ることに 無限の意味を見いだす

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第39回から第41回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第39回は『浄土論』の「不^ふ虚^こ作^じ住^じ持^う功^う徳^き」について、第40回は「一^い念^ち多^た念^ん文^{もん}意^い」と不^ふ虚^こ作^じ住^じ持^う功^う徳^きについて、第41回は「菩薩功徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第39回の問題提起から、その一部を紹介する。（越部良一）

■ 本願力回向

不^ふ虚^こ作^じ住^じ持^う功^う徳^きの文言は、「観^{かん}仏^{ぶつ}本^{ほん}願^{がん}力^{りき} 遇^ぐ無^む空^{くう}過^か者^{しや} 能^{のう}令^{りやう}速^{そく}満^{まん}足^{ぞく} 功^く徳^{とく}大^{だい}宝^{ほう}海^{かい}」（『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部）、「仏の本願力を観ずるに、遇^もうて空^{くう}しく過^{ひな}ぐる者なし」、そして「能^よく速^{そく}やかに功徳の大宝海を満足せしむ」と。「本願力」という言葉は、『浄土論』中ではこの部分と、あとは偈文についての注釈の最後のほうに「本願力回向」と、その2回だけ出てくる言葉です。最初の「観」という言葉を、親鸞聖人は、「遇」の字とあわせてご覧になっていて、単に心で何かを見て観察していくという人間の努力ではなくて、本願力に遇^あうことだと。本願力に出遇^いうというのは、一般の浄土教の関心からすれば、あの世に往^いたら出遇^でえるのだと、こういうふう考えるのでしょうか、それを、「本願力回向」という言葉から、親鸞という人は見直した。

如来の、どこまでもたすけずんば止まん、と

はたらく願いが回向なのだ。如来の大悲は、われわれが知るも知らざるも、いつもわれわれにはたらき、われわれに呼びかけている。この回向のはたらきに、われらが値^ち遇^ぐする。このことと「遇無空過者」と言われる「遇」とは、別なことではない。まあ、自力で言うなら、浄土に往^いって菩薩になって、それから出遇^でうと、そういう話になるのでしょうか。けれど、『浄土論』をよくよく読んでみると、大悲が衆生にはたらきかけるということを語ろうとする論であると。愚かな身のところに、いま出遇^でえるのだと。それは、凡^{ぼん}夫^ぷからは往^いくことはできなくても、大悲からは来ているのだということを実感できる、そういう教えです。

この本願力回向を抜いたら、親鸞聖人という人の言葉は、大事な中心を抜いた家みたいなものです。本願力回向が、親鸞という人の思想を建てているわけです。それをはっきりといただかないと、それに出遇^でわないと、親鸞聖人がおっしゃる、凡^{ぼん}夫^ぷで生きていて、本当にそこにそのまま救いがあるという、そういう道が開けて来ないのではないかと思います。

■ 大事な、大事な莊嚴功徳

私たちは、目の前にあるさまざまなことで悩み、目の前にあることが、何とかなればたすかるのではないかと考えている。けれども、本当は、目の前にある問題は、有限の問題とはいえ、ほとんど解決しない問題ばかりです。まして、われわれは、自分の思うままにならないさまざまな条件を与えられて生きて、もがいている。自分の思うままになる条件なら、たすかる

と思うけれど、本当はそうではない。思うままになるということはないし、もし、思うままになる世界があったとしても、人間は堕落するだけである。つまり、歩まなくなる。

宗教的なものに触れてみると、人間はたすかるということはないのです。常に、何か深い悩みを、深い矛盾を孕んで生きているものなのです。「ああなったらいいだろう」「こうなったらいいだろう」と言うけれど、どうなってもだめなのです。だから、お釈迦さまは「生老病死」と。生きているということが矛盾であり、そこに病氣等があるって、思うままにならない。だから、生きていることは苦悩なのです。それでは、死んだらいいか。安田理深先生は、死んで解決すると思うのは、本当の解決ではないのだと、繰り返しおっしゃっていました。一時停止みたいなものだ。逃げただけのことである。この苦悩の根源を本当の意味で見定めて、そこから立ち上がり直すことができる道が、仏陀が教えてくださる道である。これに出遇うまでは、われわれは歩むしかない。

われわれは、いつも何か時が^{またた}瞬く間に過ぎていってしまっていて、無駄に過ごしたと思う。どれだけ充実していると思っても、願^{かえり}みると、何か速いと言いますか、何をしていたのかなという感じですね。一向に満ち足りないで、瞬く間に時が過ぎて人生を終わってしまう。だから、何とか満たそうとして、いろいろやるけれども、それでも何となく過ぎた。そういうのが人生の悲しみだろうと思うのです。

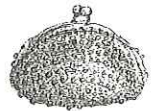
そういうものに対して、“空しく過ぐる者はない”という信を与えるのが、本願力なのだ。これに出遇えば、無駄なものは一つもない、そういう実感が与えられる。つまり、苦悩が無くなってたすかるのではなくて、苦悩も悲しみも、すべてが意味をもって^{よみがえ}甦ってくる。こういう人生が開けるのが救いだというのが、親鸞聖人が生きた道であり、われら凡夫に教えてくださる道だと思うのです。

私たちは、苦悩が無くなって、立派な人間になってたすかるのだと思うから、いろいろな善

を積もうとするけれど、どれだけ愚かであろうと、どれだけ無駄なことばかりやっていると、実は一つも無駄ではないという眼が開き直されてみたら、ここに居ることの意味がまったく変わるわけです。どこかに往かなければたすからないのではなくて、ここに居ることに無限の意味がある。そういう眼が与えられてくるなら、どこかに逃避してたすかるという発想ではなくなるわけです。そういうふう^{ひるがえ}に翻^{ひるがえ}って、ここに居ることをいただける眼が与えられる。それが“回向に値遇する”ということなのだろうと思うのです。

本願力に出遇^{だいぼう}うなら、「しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつ」（『一念多念文意』同544頁）と、親鸞聖人はおっしゃる。われわれには見えない。求めてもいない。大体、知らない。けれども、本願力に出遇えば、そういうふうに身が拝めますよ、と言うわけです。拝めるような心で見直してみると、わが身だけでない、一切の衆生の身が、尊い身として拝めるようになる。大悲が願っているところが、少しく感じられるようになる。大転換の眼が与えられるのが、回向の事実である。だから、回向という一点を忘れたら、親鸞聖人を見る眼は無くなるわけです。どれだけ親鸞聖人が、この不虛作住持功德の言葉を喜ばれたか。これは大事な、大事な莊嚴功德だろうと思います。

（文責：親鸞仏教センター）



「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2005年12月20日（火）午後6時30分～9時

2006年 1月17日（火） 同上

2月10日（金） 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

ずということなしとしるべし」とそうらいき。
また、あるとき「唯円房はわがいうことを
ば信ずるか」と、おおせのそうらいしあい
だ、「さんぞうろう」と、もうしそうらいし
かば、「さらば、いわんことたがうまじき
か」と、かさねておおせのそうらいしあい
だ、つつしんで領状もうしてそうらいしか
ば、「たとえ、ひとを千人ころしてんや、
しからば往生は一定すべし」と、おおせそ
うらいしとき、「おおせにてはそうらえど
も、一人もこの身の器量にては、ころしつ
べしとも、おぼえずそうろう」と、もうして
そうらいしかば、

「さてはいかに親鸞がいうことをたがうま
じきとはいうぞ」と。「これにてしるべし。
なにごとにもころにまかせたることならば、
往生のために千人ころせといわんに、すなわ
ちころすべし。しかれども、一人にてもかな
いぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。

わがこころのよくて、ころさぬにはあら
ず。また害せじとおもうとも、百人千人をこ
ろすこともあるべし」と、おおせのそうらい
しは、われらが、こころのよきをばよしとお
もい、あしきことをばあしとおもいて、願の
不思議にてたすけたまうということをしらざ
ることを、おおせのそうらいしなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

また、あるとき聖人が「唯円房よ、あなたは私の言うことを信じ
受け入れるか」とおおせられたので、「もちろんです」と申しあげ
た。そうしたところ、「それでは、私が言うことに背かないか」
と、さらに重ねて念を押されたので、誓って背きませんと申しあげ
た。すると聖人は「それではまず、ひとを千人殺してみなさい。そ
うすれば、浄土への往生は決定するであらう」とおおせになった。
それに対して「聖人のおおせではありませんけれども、たとえ、一人
たりとも私のようなものには殺せそうに思えませんが」と答えたこ
ろ、

聖人は「それでは、どうして私が言うことに背かないと言ったの
ですか」とおおせられて、「これによって、わかるでしょう。すべ
てのことが、自分の思うままになるのであれば、浄土往生のため
に、ひとを千人殺せと言われたならば、ただちにそうできるはずで
ある。しかし、一人たりとも殺してしまうような宿業の深い背景が
ないから、殺せないのである。

私のこころが優しく善良であるから、殺さないのではない。また
殺すまいと思っても、百人はおろか、千人を殺してしまうこと
もあるのだ」とおおせになった。

それは、私たちのこころが善ければたすかるような存在だと思
い、悪ければたすからないような存在だと思つて、自分の善悪の基
準に固執し、広大な本願によつて善悪を超えてたすけられることを
知らない、ということをおおせくださったのである。

語 註

①「本願ほこり」阿弥陀の本願に甘えて、思い上がり、いい気にな
ること。「悪人をたすけるのが阿弥陀の本願だ」と受け止め、あ
えて悪事を行い、阿弥陀如来に気に入られようとする邪説。
唯円は、「本願ほこり」の主張を批判しつつ、「本願にほこる」
ことが、他力の信心であると意味転換していく。

②「宿業」無始以来の行為や経験の蓄積が、現在の自己となつてい
るという存在理解が仏教の立場である。したがって、現在の行為
や経験は、過去の行為や決断の結果の影響を受けるが、「現在」
は、善悪の両面の可能性を孕んでいる。「過去」に対する自己の
責任感と、「未来」に対する安心感を包んだ概念である。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

『anjali』第10号および

『現代と親鸞』第9号を刊行

このたび、『anjali』第10号(写真上)、
並びに『現代と親鸞』第9号(写真下)を
刊行しました。

『anjali』第10号では、前東大総長の佐々
木毅氏、言語学者の田中克彦氏、ひまわり
クリニック院長の森津純子氏、日本経団連
専務理事の矢野弘典氏、仏教学者の末木文
美士氏、映画監督の森達也氏、宗教学者の
島蘭進氏、科学史家の金子務氏、元駐モロッ
コ大使の佐藤裕美氏など、十名の各専門分
野の方々に、現代社会・現代人の諸課題に
ついて、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第9号では研究論
文のほか、「現代と親鸞の研究会」から、
倫理学者の西平直氏、経済学者の暁峻淑子
氏の問題提起と質疑、「清沢満之研究会」
から東京経済大学教授の今村仁司氏の講義
と質疑。また、「親鸞思想の解明」シンポ
ジウムから、仏教学者の下田正弘氏の講演、
元朝日新聞記者の菅原伸郎氏と本多所長の
提言。さらに、本多所長の連続講座(五講
座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十三条には、「宿業^{しゆくごう}」という意味深い言葉がある。親鸞は使っていない、これは唯円の創作だと考えるひともある。

それはともかく、曾我量深は、宿業を運命論ではなく、宿業感として受け止めよ、と言う（『歎異抄聴記』）。現在の苦境は過去世に犯した罪の報いだ、すべては決定しているのだ、という解釈は運命論である。過去世に責任のすべてを押しつけて、現状肯定させる解釈である。宿業感とはそれと違う。無限の過去から、無量無数の縁によって、「わたし」が「わたし」と成ってきたのだと知り、その事実に感動することである。いわば存在の原点が開かれることである。いま流行の「ビーイング being」と「ドゥーイング doing」に置き換えれば、宿業は、人間に「ビーイング」を開示するものである。「ビーイング」が成り立って、はじめて「ドゥーイング」がはたらき出す。逆ではない。（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十三条〉その1

原文

弥陀^{みだ}の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願^{ほんがん}ほこりとて、往生^{おうじやう}かなうべからずということ。

この条、本願をうたがう、善悪の宿業^{しゆくごう}をころえざるなり。

よきこころのおこるも、宿善^{しゆくぜん}のもよおすゆえなり。悪事^{あくじ}のおもわれせらるるも、悪業^{あくごう}のはからうゆえなり。

故聖人のおおせには、「卵毛羊毛^{うもうようもう}のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業^{しゆくごう}にあら

現代語訳

人間の思慮を超えた阿弥陀の本願が「悪人を救う教え」であるからといって、悪を犯すことを恐れないのは「本願ほこり」であり、「阿弥陀の浄土へ往生することができない」ということについて。この主張は、阿弥陀の本願への疑いであり、善悪の行為が人間の思いを超えた無数の条件や契機に促されていることを理解していないのである。

善い行いをしようという思いも、善を促す無数の背景や条件から起こってくるものであり、悪い行いが心に浮かぶのも、思いを超えた無数の背景や条件がそうさせるのである。

いまは亡き親鸞聖人は、「兎や羊の毛の先にある塵のような小さい罪（チラツと心をかすめるような悪意）を犯すのも、すべて思いを超えた無限の因縁が背景にあると感知すべきである」とおおせられた。

親鸞仏教センターの動き

(2005・9・11)

■2005年

- 9・1 『親鸞仏教センター通信』第15号を発行。
第102回研究会（研究・交流・出版等の具体化に向けた協議と実働企画。第60回「歎異抄」研究会。以後、3回の研究会を開催。
- 9・2 第68回英訳「教行信証」研究会。以後、3回の研究会を開催。
- 9・9 親鸞聖人ご命日のつどい
学会発表（春近教願託研究員「近代ドイツの仏教解釈―II・ハースの位置をめぐって」・日本宗教学会第64回学術大会・関西大学）
- 9・10 第25回現代と親鸞の研究会「本当の教育とは何か」東京大学大学院教育学研究科教授・佐藤孝氏（文京区・東京ガールズパレス）
- 9・27 第2回英訳「教行信証」再版編集会議
親鸞聖人ご命日のつどい。第4回英訳「教行信証」グロッサリ研究会。以後、2回の研究会を開催。
- 10・14 第41回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）。第38回清沢満之研究会。以後、2回の研究会を開催。
- 10・21 親鸞聖人ご命日のつどい
第3回親鸞思想の解明シンポジウム。講演・「科学・哲学、そして宗教の間の対話を求めて―科学者は現代の状況に免責か?」國府田隆夫氏（東京大学名誉教授・物理学者、パネリスト・斎藤勝治氏（放送衛星システム顧問）、本多弘之所長（千代田区・東京国際フォーラム）
- 11・11 「EBC」第10号、「現代と親鸞」第9号、「親鸞仏教センター通信」第16号を発行。
- 12・1

現代と親鸞の研究会・第17回

本当の「豊かさ」とは何か

埼玉大学名誉教授 暉 峻 淑 子



暉峻淑子 氏

2005年1月17日、東京ガーデンパレス（文京区）において、埼玉大学名誉教授の暉峻淑子氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。真の豊かさとは何かを追求する暉峻氏に、豊かさをもった生活とは逆流する、現代資本主義社会の問題点について語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 日本人の貧困な精神構造

私たちはバブル時代をとおして、人はお金だけで決して幸せになれないし、人間として豊かな気持ちになって生きていけないということに気づいたと思います。これは、日本人にとっていい教訓であったと思っています。

ただ、お金儲けをどんどんやりながら、同時に心は豊かに、みんなが共存して、自然も含めた周りの人のことも思いやる人間になりなさい、というのは偽善です。なぜかと言えば、例えば、自然環境や他人のことを思っていたのでは、いまのような経済成長はできなかったからです。だから本当に心を豊かにしたいなら、すべてに優先して金とモノを追いかけることをやめなければいけないと思うのです。

「何のためにお金を儲けるのか」と聞かれたら、私なら、「お金がないために死んでいく子ども、病気が治せない人、飢え死にする人に分けるためにお金は必要です」と答えます。なぜ日本が、経済だけを追いかけていく盲目的な国

になってしまったのでしょうか。いまの日本は、国の富を増やして、経済大国にのし上がっていくということと、人間らしい生活を人々が営めるような社会を維持していくということが、まったく別問題になってしまっています。本来、「経済」というのは、よりよい人間関係のための社会をつくることなのに、正反対になっています。

■ 上下格差を広げる政策

資本主義社会の一番の問題点は、人間を商品扱いにしているということではないでしょうか。現在は、バブル後の不況を切り抜ける方法として「新自由主義市場経済」が考えられていますが、これは、弱肉強食の社会をつくるということです。「社会ダーウィニズム」と言われて、お金持ちの人間にはもっとたくさんの富を与えて、一般の人には、その富を分け与えない社会をつくらうとしています。現在の経済政策は、国民一般の生活はどうでもよくて、マクロとしての国の富が増えればよく、バブル後の損失が国民の犠牲によって早く埋め合わせされるべきだという方策を立てているのです。

このような状況のなかで、現代の社会はあらゆる面で、意図的に上下の格差をつくり出しています。例えば、教育においても、エリート校の学校をつくり、エリート校にはたくさんの補助金も来ます。しかし、これは逆ではないでしょうか。生徒に手取り足取り教えなくてはいい学校にお金をかけるべきなのに、進学校が何でお金を貰うのでしょうか。

また、「習熟度別指導」というのも、早い時

期にエリートとそうでない生徒を分けて、子どもがそれに不満をもたないように、学校に『心のノート』（文部科学省作成）という冊子を配っています。『心のノート』は、いかにも精神主義みたいですが、内容を見ると、あなたが不幸なのも、就職できないのも、高校に落ちるのも、すべてあなたの責任ですということなのです。教育においても、そういう格差を意図的に作り出す社会を何とも思わないという人間の考え方が、とても怖いと思っています。

税制もそうです。「老年者控除」もなくなります。今後、「勤労者控除」も半分ぐらいに圧縮して、最後は3分の1ぐらいにしてしまう方針です。その控除がなくなれば、当然、税金が増えます。庶民に対する課税です。非正規職員というのは昇進もないし、社会保険もめったに付けてもらえない。解雇されても退職金もありません。

いまの失業状態というのは、利潤を求める資本家の要求に従って、失業者が故意につくり出されています。いま高齢者のためのいろいろな器機や補助器具などは、本当に足りません。ガン治療の開発とか、エイズの撲滅とか、いろいろと足りないものがあります。ところが、企業は、人間の不幸を軽減する商品の開発よりも、手っ取り早く解雇したり、正規社員からパートに替えたりして、利潤率を上げてきたわけです。働くばかりで、ものを考えない日本人のあり方について問われていますが、やはり不安定にしか働けないということは、人間にとって深く考えたり、計画的に責任ある生き方ができないということです。

■ 競争社会の歪み

現在の競争は、富や利潤をどれだけ生み出せるかという、目的に向かった競走です。それ以外のものはみんな切り捨てられます。競争ほど不自由なものはない。いま学校では、子どもがミスをするのが許されていないのです。ミスを許さない社会はとても恐ろしいですね。

やはり、日本の社会が変ですね。会社でも、

うまく商業の取引契約をまとめてきたとか、会社の利潤に貢献する発明をしたとかということ人で評価するけれども、決して人間性とか倫理観で社員を評価しないのです。

競争が激しく出てくるのは、資本主義社会になってからでしょう。それが何か人間の本来の生き方であるかのように、学校でも競争、企業でも競争、国と国も競争になってしまっています。でも人間の自然な感性は、競争主義のなかで、どこか納得できないというか、幸せだとは思っていないのです。やはり、自分自身は^{あざむ}欺けないのです。だから、グローバルな資本主義の潮流に乗っているけれども、実は、みんな不幸なのです。社会の流れに乗って、自分もその流れを加速するように励んでいるけれど、みんなどこかで人間が壊れると思っているのです。

（文責：親鸞仏教センター）

暉峻 淑子（てるおか いつこ）埼玉大学名誉教授

1928年、大阪府生まれ。日本女子大学文学部卒業後、法政大学大学院博士課程修了。経済学博士。専攻は生活経済学。専門分野で活躍するほか、政治、経済、社会問題で広く発言をしている。また、NGO・国際市民ネットワーク代表として、旧ユーゴスラビアの難民支援活動も精力的に続けている。著書に『豊かさとは何か』『豊かさの条件』（以上、岩波新書）、『ほんとうの豊かさとは』『なぜ教科書裁判をたたかったのか』（以上、岩波ブックレット）、『豊かさへの接近』（産業統計研究社）、『ゆとりの経済』（東洋経済新報社）、近著に『格差社会をこえて』（岩波ブックレット）など多数。また、『アンジャリ』第8号に「教育を問い続けて」、『現代と親鸞』第9号に「本当の『豊かさ』とは何か」（共に親鸞仏教センター）を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

■ 新企画「いま新たに聞く——釈尊・法然・親鸞の世界」公開輪読会

親鸞仏教センターでは、2006年2月から、「いま新たに聞く——釈尊・法然・親鸞の世界」をテーマに、公開輪読会（3カ月・連続12回）を開催します。当センターの研究員といっしょに仏教の『聖典』を学び、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教のことばに、現代を生きる力を見いだしていきたいと思ひます。皆さまのご参加をお待ちしております。

■ 釈尊——真理のことば（全4回）

釈尊は、菩提樹の下で何を悟り、何を弟子たちに語りかけたのか。最古の經典の一つであり、パーリ語によって伝えられている『ダンマパダ（法句経）』をとおして、釈尊のことばに耳を傾けていきたい。

テーマ：『ダンマパダ（法句経）』を読む
日 時：2006年2月8日(水)、16日(木)、22日(水)
3月1日(水)

いずれも午後6時30分～8時30分
担 当：羽塚高照（はづか たかてる）研究員

■ 法然——念仏ひとつ（全4回）

念仏とは何か、どのような意味があるのか。念仏だけで救われると聞いても、なぜ、そう言えるのか。また、どのように救われていくのか。私たちには、なかなかうなずくことができない。そうした念仏についての問いを法然に尋ねていきたい。

テーマ：『選択本願念仏集』を読む
日 時：2006年3月8日(水)、15日(水)、22日(水)、29日(水)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：嵩 海史（かさみ ひろし）研究員

■ 親鸞——凡夫を生きる（全4回）

親鸞が生涯をかけてあきらかにされた浄土の教えは、現代を生きる私たちにどのようなメッセージを投げかけているのか。浄土について著した『教行信証』『化身土巻』をとおして、私たち一人ひとりの立脚地を尋ねていきたい。

テーマ：『教行信証』『化身土巻』を読む
日 時：2006年4月5日(水)、12日(水)、20日(木)、27日(木)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：伊東恵深（いとう えしん）研究員

■ 申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料です（ただし、資料代等の実費はご負担ください）。定員20名。途中からの参加も可。

親鸞仏教センター公開輪読会 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

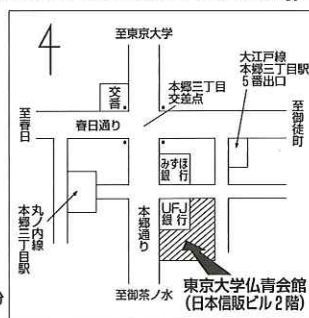
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp

■ 会 場

東京大学仏教会館
セミナー室
(本郷三丁目・
日本信販ビル2階)



東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分

武田定光囑託研究員が『新しい親鸞』を出版

本紙（4～5頁）、『歎異抄』研究会の主宰者である武田定光氏（当センター囑託研究員）が、このたび『新しい親鸞』（1,800円＋税）を出版しました。

社会評論家の芹沢俊介氏は、「自力とはつねに「いかにしたら」を問おうとする意識性だ。では他力とは？ 「いかにともしがたい」いのちの事実としての身体性である、と著者は答える。自力のところが、他力の事実に出会うとき、おのずと起こる動揺と葛藤こそを親鸞は生きた。このような著者の親鸞像に、静かな戦慄と興奮が背筋を走るのを覚える」と「推薦のことば」をおくっています。

お求めは、雲母(きらら)書房(TEL03-5331-3343)まで。



あ と が き

本年8月27日、東洋大学名誉教授で宗教社会学者の高木宏夫先生がご逝去された。この親鸞仏教センター設立にあたっては、真宗大谷派の首都圏における研究交流機関設置のための「首都圏学事構想企画推進会議」委員として、大変お力添えをいただいた。ここにご生前のご功勞を憶念し、謹んで哀悼の意を表するものである。▼親鸞仏教センターでは、今春から「いま新たに聞く——釈尊・法然・親鸞の世界」と題して、連続12回の公開輪読会を開催することとなった。研究成果が、単に教理学や文献学に留まることなく、生きた生活者の言葉として、より一層、実践的な教養として創造され、表現されることを願っていることである。学生やサラリーマン、主婦など、ご参加くださる方々と共に、仏教の教える人間像を、いま一度『聖典』の言葉にたずね、学び、一人ひとりが、いまを生きる確かな眼を新たにみだしていただければと願っている。▼本紙（第9号）でご紹介した理学療法士の三好春樹氏は、長年の老いや介護の取り組みのなから、近代が抱えるさまざまな問題をとらえる視座に、「プリコラージュ（手作り）」という視点をもって活動されている。ベルトコンベアー式の大量生産ではできない一人ひとりの手作りの意味が見直されている。氏は、画一的でない、創造的、個性的な介護こそがこれからの介護のあり方だと言われる。今回の公開輪読会が、『聖典』に真向かいになってわが人生を静かに問い、かりものではない、自分自身の人生を互いに育んでいこうというものである。ここ東京で、多くの方々と新たな出会いが開かれることを願っている。（長谷岡）

『アンジャリの会』(anjali 個人購読)

入会者募集中!

『anjali』（合掌の意味・年2回発行）の個人購読を受け付けています。ぜひ、『アンジャリの会』にご入会いただき、ご購読ください。

◆年会費 1,000円（送料込）

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp